OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

初修外国語としての中国語教育
—本学の現状と問題—

髙 橋 明 郎

はじめに

本学に着任して以来，この3月(平成3)で丁度4年間中国語を教えたことになる。着任時の1年生が卒業するという1クールが終わったところで，本学の中国語教育の二・三の問題を考えてみたい。それらはまた一部で，既修外国語(英語)や他の初修外国語(独・仏・露)とも重なるものであろう。

1. 本学における履習方法

初めに現行の中国語の履習方法について簡単に説明しておく。

卒業要件は別表のとおりである。教育学部教員養成課程を除き，初修外国語は必修であるが，開設されている独・仏・露・中の四ケ国語の選択方法は学部により異なる。

経済・法の両学部にあっては，あらかじめ定員を定め，学生に第一志望から第四志望までをマークシートに記入させた後，乱数表を用いた抽選でそれぞれの外国語クラスに学生を配している。現在は，学生定員の臨時増，更に本年度からの経済学部の学生定員改定により，1クラス67名。中国語は2クラスあり，本年度入学生については，数名を除き中国語を第一志望とする者で構成されている。

農学部，及び教育学部は特に定員は決めていないが，一応60名程度を上限とし，それを上回る希望がある場合は他の外国語に回ってもらうことにしている。しかし幸いここ2年程は受講を断る状況ではなく，希望者は全員受講できている。本年度の農学部受講者は15名，教育学部受講者は30名である。

中国語選択希望者数は，定員の倍近い希望があった88・89年度頃がピークであった。しかし，ドイツ統一，ソビエトの開放政策，中国の天安門事件等の世界

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

情勢の変化と，私ども中国語の講義体制の変更等によって90年度には受講希望者が激減し，経済・法学部では第一志望の学生が定員を大きく下回り，教育学部でも前年60名程だった受講者が約10名となった。が，本年度は経済・法学部で前述のようにほぼ定員の数に第一志望者数が回復し，教育学部でも志望者数は既に底を打って回復しつつある。

しかし，数年前までの高人気はむしろ些か異常であり，本年度程度の志望者数が常識的ではないかと思う。

中国語は初級・文法（Ⅰa・Ⅱa・初級と銘打っているが文法のクラスはこの２つのみである）と，発音やヒアリングの練習をする初級・発音（Ⅰb・Ⅱb）が一年次向けとして，文学作品を題材に読解のトレーニングをする中級・読本（Ⅲb・Ⅳb），その他会話・作文，或はドリル等を行う中級（Ⅲa・Ⅳa）

表　香川大学の卒業要件としての現在の外国語単位
（中国語・英語の場合）

			初級				中級				上級		英	卒業要件の外国語総単位数
	標準履習年次		1				2				3又は4			
	グレード		Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ	Ⅵ		
卒業要件の初修外国語単位数	学部・コース ＼ 科目		a 文法	b 発音	a 文法	b 発音	a	b 読本	a	b 読本			語（単位）	
4	農学部		○	○	○	○							8	12
4	教育学部	総合科学〈理科〉	○	○	○	○							8	12
※0乃至8	教育学部	教員養成※	○	○	○	○	○	○	○	○			0乃至8	8
8	教育学部	総合科学〈文科〉	○	○	○	○	○	○	○	○			8	16
8	教育学部	総合科学中国語文化専攻	○	○	○	○	○	○	○	○	△	△	8	16
8	経済学部		○	○	○	○	○	○	○	○			8	16
8	法学部		○	○	○	○	○	○	○	○			8	16

※　一種の外国語で８単位を修得する。
（英語のみでも初修外国語のみでも構わない）

△　専門科目名で受講する。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

を二年次向けとして開設している。更にこの８単位修得者は上級（Ⅴ・Ⅵ）を受講することもできる。この二つの上級クラスは，教育学部総合科学課程・言語文化コース専門科目の中国語学演習，中国語文化演習と共通のものであり，同コースの中国語文化専攻学生にとっては必修科目である。

開講数は初級が一科目各４，中級が一科目各３，上級が１クラスで，他に初級再履習クラス２である。（半期数）

2.　到達レベルを巡る問題

2.0　問　題

上述のように本学では中国語は三つの級，六つのグレードに分れている。そして学生は初級のみ，或は初級・中級といった科目を学ぶわけだが，実のところ，これは単に中国語を８乃至４コマ受講するということが，或は１乃至２年間にわたり学習するという形が残っているだけで，その期間の学習の後で学生が得る外国語の力は，クラスによってばらばらである。

西槇光正氏は最近の日本の中国語教育をレポートした論文の中で，初級と中級の概念が実にあいまいだと指摘している[1)]。初級或は中級と銘うった教科書を使用すれば初級の，或は中級の教育になるといったものではない筈だが，実際には，こうした特に根拠のない級の区別に従ってしまっている面がある。

勿論一人一人の教官は，それぞれに初級・中級の設計図を持ち，それに適う教材・講義方法の選択をしているであろうから，一人があるクラスの総ての講義を２年間持ち上りで担当するとすれば問題はまだ小さいが，現実には複数の教官が１クラスを分担することになるから，級・グレードのあいまいさは多くの問題を含んでいる。

入門期は別として一年次の後期には各教官間のレベルのばらつきが生じはじめる。当然グレードが進むにつれ，そのばらつきは大きくなっていく。かくして中級では，全く同じグレードの科目であるにもかかわらず，それをある教官が演習形式で行う一方で，別の教官は学生に殆ど聞き役に徹させる講読の形で行うという状況が生じている。結果学生に要求される勉強量も，又単位を得た時点での学生の力もそれぞれ全く異っている。こうして他の教官の科目を引き

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

継ぐ際にも多大の障害が生じている。

こうした事態の責任は，あげて専任教官にある。非常勤講師に対し，「1年生の中国語」とか「2年生の読本を1コマ」とかの目的設定を欠いた講義依頼をしてきたことの当然の帰結が生じているのである。私が嘗て非常勤で教えていた大学でも，教科書は指定だったとはいえ，1年間で一体どこまでを学生に身につけさせればよいかについては特に指示されず，同じ科目を担当する他の先生は一体どこまで教えておられるものかと気になったりもした。

この問題の解決法としては，一つには，例えば慶応大の新学部で考えられたように，完全な語学の共通カリキュラム，成績判定の一体化というものがある。その成果如何はいずれ公表されることになろう。

ただ私自身の受けた語学教育を思い起こせば，教官個々の特色ある講義方法はやはり魅力的である。そこで到達目標については合意を持ち，そこに至る手法は教官に委ねるという形が，実施のしやすさから言っても適当であろう。

中国語の科目が，もともと初級（文法・読本）中級（文法・読本）という名で構成されていたことからすると，開講当初は或る程度はっきりした目標が設定されていたと思われるが，スタッフの増加，入れ替りと経年変化によって，もはや当初のそれを推し測れない程，講義の運用が自由化されてしまっていた。

そこで，最近新しくスタッフに加わっていただいた非常勤講師には，例えば初級のb系列のクラスでは，発音の習熟と語彙の増加に重点を置くといった依頼をする等少しずつ整理を行っているが，なお一層の整理が必要となってこよう。

2.1　レベル

それでは初修外国語として，どこまでの到達度を学生に要求できるか。ここで考えておく必要があるのは，前述のように，本学の場合1年間しか中国語を学習しない学部・コースと2年間学習をする学部・コースが有るということで同じ初級という名の下に行われる1年間4コマの内容は二者の間では自ら別のものと見るべきだということである。そこでそれぞれの場合について検討してみる。

2.1.1　2年課程の最終レベル設定

2年間にどういった種類の力を学生に与えるべきか。学生の中国語志望の動

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

機は多様であり，『一般教育研究』38号談議室に本学渡辺教授（仏語）が開陳しておられるように，英語嫌い（というより不得意なのである）の子がアルファベットを使わない（と彼らは思っている）中国語に望みをつなぐ，といった動機も今なお健在である。が，そのことはおいて，一応真面目な中国語学習の動機としては，必ずしも大学での学習に限ったことでなく，王洪順氏の３つの分類にほぼつきていよう。即ち，将来の実務・旅行等の為の実用型，中国古代文化研究・学習の為の温故型，今日の中国理解の為の知識型である[2)]。

我国の外国語教育論議でも，実用論とその他教養論が有るが，いずれかに偏ることは好ましくなく，学生の多種の動機に応ずる為にも，この２つの並立を考えるべきであろう。

そこで，まず実用という点を見ると，そこには会話力，作文力，読解力等が有るが，このうち現在の教官数，コマ数で実効が見込みあるのは読解力の養成であろう。

一般に実用というと会話というイメージが有ろうが，少しでも成果の残るものとするには現体制では大変な無理がある。週２コマ２年間，しかも途中に相当長い夏・春のブランク，１クラス70名近い規模。

会話を仮に重点とするなら，１クラス20名程度，週３回以上の授業，そしてネイティブスピーカーの教官の確保は欠かせない。そうした手当てなしに会話面重視の授業を行って，会話力はそれほど改善されるわけでもないのに読解力は確実に減っているとしか思えない中学の英語教育の惨憺たる結果は参考になること大である。

外地で何年か過した子が帰国してその言語を使用しなければ，早々にその言葉をあやつる力が失せていくように，２年学んで残り２年も卒業まで使わずに過せば，耳からだけ得た力はほとんど残存する望みがない。

又作文は最も高度な語学力の要求されるものであって，既に不十分でも中高６年間の蓄積のある英語はともかく，入門期から開始する８コマの中では，さのみの成果は望めない。

この２つは，初級程度はともかく中級以上では，日本人教官で行うことは好ましくない。教官に何年留学経験が有ろうと条件は変らないし，今日では専門

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

の中国語課程を持つ所なら，会話や作文は中国人教師の担当とするのは半ば常識化している。そういう形でなければあるレベル以上は無理である。

勿論学生の学習動機の１つがこうした表現の分野にあることは無視できるものではない。が，今のところこの２種は，むしろ上級相当として開設すべきであろう。

こうしたことを考えれば，従来の読解力養成中心というやり方は，初修外国語としては，現状では理に適っている。実際読むことへの要求は，会話等と同じく学生間に存在している。今年度の中国語選択者のアンケートでも，選択理由として，「中国の多くの文献を読んでみたい」（法学部）「中国の文献を原語で読みたい（同上）「中国の文学作品を原語で読んでみたい」（経済学部）といった記入がされている。又専門課程での学習にも最も有用であろう。

この読解力養成という面での一般の受講者の最終レベルは，私の見るところ，学生が素直な資料なら辞書を与えられなくとも大意がつかめ，辞書を頼りにすれば，中級では多少時間がかかっても資料を読み進められるという段階である。実のところ，これ以下のレベルでは，２年間を費すものとして，実用面では発音を覚えるという以外全く無意味な学習と言わざるをえない。後述の異文化理解という面は仮に得られるとしても，それだけのことならば外国語として２年間８コマを当てる必要は無いのである。

この観点からすると，市販の初級・中級のテキストを各教官が無計画に１冊とか２冊すませるということでは不十分である。これは中国語だけのことかもしれないが，各テキストそれぞれが実はかなり似かよっていて，下手をすると同じ中味を学生が２度聞かされるということになるからである。

１年間の中級のクラスで，簡単な資料なら大体こなせるというレベルに，クラスのある割合以上到達させる，この目的の為に，ここ２年間中級の私の読本のクラス（Ⅲｂ・Ⅳｂ）を次のように運営している。

最後のⅣでは，市販のテキストは用いない。プリントを作って，注音はもとより語注も全くない，つまり原書の形のものを使う。上級，もしくは専門科目での演習に学生を引き渡すまでに一度も原書にふれさせないというのでは不親切というもので，車の運転でいうと路上教習のようなものを一度行っておく。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

題材は読み物，大抵は小説，去年は受け持った学生に前期に提出させたレポートで「三国志」に興味を示したものが幾つか有ったので，「三国志」の連環画を使ってみたりした。（敢えて論文を外している理由は次項で述べる。）ただ注を与えない為，魯迅とか老舎等は選ばず極く近年書かれた，くせのないものを選ぶよう配慮している。

学生が講義で要求されるのは文の音読と訳だけであるが，準備にはそれなりに時間がかかる。中国語の場合ドイツ語やフランス語と違って音標文字を用いていない為に，注音を外す段階が一番苦労するわけだが，学生自身に予習として注音標記をさせることによって漢字と発音のギャップを埋める手助けをする。

勿論学生が訳に四苦八苦する場面も多く，こちらも胃が痛くなる思いをさせられるが，文法的に目をつけるべき所を指摘しながら進めていく。

因みに試験では扱った作品は出題しない。講義でやった所の訳を課すという形の試験は，学生に訳を丸暗記させる結果になるだけだし，私は講義で扱った作品そのものを教えたのではなく，それを読み進める為の勘所や技術を教えたわけで，その成果を見る為に，別の小説の一部をもとに問題を作っている。もとより，このことは4月の時点で学生に予告してあり，訳を書き取るだけのノート作りは戒めておく。

前期（Ⅲｂ）では，注もしくは注音つきのテキストで，やはり文学作品を扱う。授業では後期と同様に音読と文法上のポイントの指摘をする。この期の試験は听写（ヒアリング）で，扱った小説の一部を耳で聞いて書き取らせる。勿論範囲は短く限定しておくし，学期頭初に小説を吹き込んだテープを持たせておく。この種の試験形式を取ることで，読解の段階に入ってしまうと，とかく目のみを使いがちな学生に，常に音を意識させる。又後期の音注等全くないテキストへ入る前に，なるべく多くの語彙の蓄積（意味が分るだけでなく音も含めて）をさせたいからである。

前期の試験は，耳できく反復練習をやればやる程点が取り易い筈だが，実は学生はこの種のものが一番嫌なようで（だからこそ行う意味が有るのだけれども），クラスによっては非常に得点が低かったりする。

一方後期の試験では，クラスのほぼ4分の1から3分の1の学生が，暗記も

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

のではない総合実力テストで一応採点者が落胆しない程度の点は取ってくれるようになった。ただこの読解練習が週1回であること，学生の総てが1人で予習するわけではなく，分担して準備したりする者もいること，そしてそれぞれの国語力の問題もあって，大半の学生が原書を扱うレベルに到達させられるという段階には現在のところない。しかしこれに，辞書が与えられれば何とか扱えるというレベルの学生を加えれば，全員対象の語学の講義としては，まずまずの率の学生を，何とか外国語の勉強をした意味が有る程度のレベルに到達させられると考えている。

2.1.2 2年課程の初級

昭和63年度，国立大学協会教養課程に関する特別委員会がまとめた「教養課程の改革」で第二外国語のカリキュラムとして示されている1年次（4単位程度）のそれは「文法体系と音声面の指導を重視する」とされているが，本学でも1年次は文法・発音という2系統のクラスを置いている。

ここでの文法は，2年次で実際に原書を読む練習をする為に必要なものを1年間で教える必要が有り，若干詳しく解説せねばならない。

一方，発音系のクラスでは，流暢ではなくとも，それぞれの音と声調を区別して発音できることが何より優先される。これが不十分な学生を抱え込んだ中級の講義には著しい支障が生じる。嘗て発音符号の識別はおろか，4つの声調すらのみ込めていない学生が中級の過半であったことが有り，その為読本を正しく読み直させているうち，100分間で3，4行しか進めなかったことすらあったのである。しかし近年初級の一方を明確に発音系のクラスとして当て，又ネイティヴ・スピーカーの教官を配したりしたおかげで，不十分とはいえ，全体的には破滅的状況を脱している。

今一つ音の面で大切な，音を拼音で書き取ることのトレーニングも重要である。

従って「買物」とか「紹介」とかの普通の初級テキストを利用しつつ，音に常に学生の注意を向かせる，又文法のクラスで十分にできない，実際に口を動かす機会を多く与えるという2つを柱に授業は進行されるべきである。

又，ここでは試験として発音と听写を必ず課すことで，クラスの目的をより

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

はっきりさせられるであろう。

2.1.3 教養面

外国語の学習が単にその言葉の運用能力というプラクティカルな面に止るべきでないことは，前述の国大協のレポートでも指摘されていることである。言葉だけ達者でも，その国の文化，歴史等の知識がなければ，例えば実際に原地で活動するような際には多くの摩擦を生み出すことになる。日本の外国語教育が教養に偏しているという批判もなされるが，全く逆に，よりプラクティカルな教育をした中国では別の反省が為されている。

劉小湘は，「伝統的外国語教育は，学生に思想伝達用の言語記号を教えこむことにのみ重点を置いてきた」とし，外国人に対する中国語教育は，「単なる言語教育ではなく中国の国情や伝統文化の紹介・伝授をすべきである」としている。そうして，

対外漢語教育では，言語教育と文化教育は同時に進められるべきである，

と述べて，そのことが，ひいては言語を用いたコミュニケーション能力を学生につけさせると指摘している[3)]。

中国文化の伝授といっても，別に文学的な知識に限ったことではなく，言葉の使われる背景といったもの全般である。

講読で文学作品を扱うのも，正にそれが，言語の教材であると同時に，文化の教材でもあるからである。時に，どうせなら論文をという声が一般教育での語学に向けられたりするものであるが，少くとも中国語では詩を扱ったりせず，散文・小説を教材にしており，読みのトレーニングとしては，論文を教材に使用するのと別に異る所はない。専門分野の論文を読む時障害となるのは，専門用語だけであって，それは辞書を与えればすむ問題であり，態々折角の文化背景を知るチャンスをつぶす必要はなかろう。

文化背景の教授には，前出の論文で劉小湘も述べているように，映画もまた秀れた教材である。私は最後のⅣのグレードでは，なるべく中国映画を見る機会を与えている。

又，せめて１コマ１冊は，外国文化に関する本を読ませることも必要である。この際は「中国語」を扱った本というに狭い範囲の課題で，いたずらに学生の

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

関心をせばめることは避け，中国全般を扱った，或はある事象について中国を含む各国の差が分るような本も含めて課題を与えると，学生も様々なアプローチをして，レポートを読む側も面白い。

2.1.4 1年課程のレベル

1年間しか履習しないコースでは，上記のような原書を扱うといった実用レベルへ進めることは難しい。その意味でやはり2年間は学んで欲しいというのが教える側からの希望である。

しかし，現に1年間しか学ばないコースが有り，その中で可能なことを考えねばならない。

「無いにはまし」という言葉があるが，外国語・外国文化にふれる機会としての重要性は，前述国大協報告書でも述べられている通りであるから，たとえ短くとも学生には貴重な場と考えよう。

実用面では，とにかく発音のトレーニングだけは徹底したい。少しでも学んだものは後に更に学習を続ける際，全く初めてのものより楽だと言うが，その「少しでも」という程度が問題である。慢然と教師の後について復唱するだけで身体で覚えていないものは，後の再学習の際の基礎にはならない。発音のチェックは放送講座等ではなかなか補えないものだけに，折角の学習のチャンスに，この面のトレーニングだけはしっかりしてやらねばならない。その意味で，2年課程の1年次と同等もしくはそれ以上のレベルを学生に求めるべきである。

一方文法面は，中級へ接続するものよりも簡略化し，その分文化面の教授を加えられたらと思う。

2.2 クラス編成

仮にこうした形での中国語教育を進めるとすると，現行の体制ではなお考えるべき幾つかの問題が生じる。

第一に2年間課程では，以前は中級文法のクラスであったⅢａ・Ⅳａの性格づけである。ここ数年で我々はｂ系列を読解のトレーニングのクラスとして位置付けたが，ａ系列はそれ以外の分野という，あいまいな位置付けしかしていない。それは，このもう一つの枠で会話なり作文なりを多少とも試みるか，こちらも読みのトレーニングに当てて，ｂと異り論文を扱うものとするかが決め

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

られなかったからである。その決定にはなお時間を要す。ただ，「中級テキスト」という何を目的にしたかさっぱり分らないが中級の名前だけは付いている多くの総合テキストを使用するよりは，読みなり表現なりに目的をしぼったクラスにすることが必要であろう。

一方1年間の課程では，まずクラスの再編成：即ち第1のグループ，法・経両学部と教育の教員養成，総合科学課程文科系の2年学習するグループは，その中でクラス分けし，一方教育学部総合科学課程の理科系コースと農学部の1年間しか学ばない第2のグループの学生はまとめて1クラスを作る。これはそれほど難しいことではない。

勿論1年間履習しか義務づけられていないコースの学生も2年履習してもかまわないことになっていて，なればこそ今まで2年間学習する学生の1年目と全く同じ科目を課していた。しかし中国語について言えば，中国語を2年次でも履習する学生は，農学部では1学年に0～1名，教育学部総合課程理科系では，創設来皆無である。

ただ，大学院進学の為に2年間学習したい（これには1年だけの学習では全く役立つまい）という学生，中国に興味が有って2年間学びたいという学生に対しては，予め申し出れば2年間コースのクラスへ配するという道を作っておくことは必要であろう。

問題になるのは，明らかに異った中味・レベルに対して同じ単位を与えるか否かということで，このことについては次の再履習クラスでもふれることになろう。

2.4　当面望まれる改変

現在の中国語内の講義内容のばらつきは，内容の重複やクラスの引き継ぎの困難さ等の問題を生んでおり，又2年間の外国語教育の間の学生の学習量の少なからぬ差という，より大きな問題をも生んでいる。

その解消の為に，各グレード，各系列それぞれのクラスの目的・性格を整理することが早急に求められよう。当面可能なのは，教科書の統一を既に行っている初級の文法では定期試験を同一問題で行い，学生の修得すべき文法知識のレベルを合せること，初級の発音クラスでは，発音の試験を課すこと（本来当

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

然の筈だが実は一部でしか行われていない），定期試験では听写（ヒアリング）の比率を上げること，中級の読解クラスで扱う教材の質（例えば注音付とか注なしとか）を揃えることである。

一方，１年間のみの受講者と２年間通しの受講者のそれぞれのカリキュラムの分別化や中級ａ系列の内容の整理については，少し時間をかけて考えるべきもので，当面は現行のままということになろう。

3. 再履習

3.0 問 題

再履習クラスの運営は曲り角に来ている。一度不合格となった学生をいま一度トレーニングして単位相当の力をつけさせるという機能は，もともと有ったかどうかも疑しいが，少くとも現在では殆どない。余程講義に出ないとか勉強しなかったとかの学生はともかく，一応のことをやってなお不合格という学生には資質の問題もあるからである。

しからば再履習クラス（以下本学の呼称に従ってＺクラス）の現在のメリットはというと，一般のペースではついていけない学生にじっくりと時間をかけて向上させるということでは全くなく，第１に新たに学習する無垢の学生の目から不勉強な力のない先輩の姿を遠ざけること，すでに限度をこえて巨大化している通常クラスの規模を，これ以上大きくしないことである。非常に残酷な言い方ではあるが，普通のクラスではとても単位を与えられない学生を，見て見ぬふりをして卒業させる為の廃品処理機関的様相を呈している。ある科目を卒業要件とするのは，その能力・学力が卒業に不可欠だという意味である筈だが，その一方で力のない学生も卒業させねばならないという二律背反の産物である。

これはＺクラスが等しくかかえる問題であるが，今は中国語の再履習というもののあり方にしぼって述べることにする。

3.1 初級文法の再履習

初級文法の再履習の問題は半期毎のカリキュラムのばらつきである。１年間で修得すべき文法事項はテキストによって詳しく述べられるか否かの差は有っ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ても，おおむね差がない。しかし当然のこと，並び方はテキスト毎に異なる。

例えばAというテキストで後期の単位が取れなかった学生，仮に受身とか離合動詞とか時量詞といったものの理解が不十分だったとする。本来この学生は不十分な所を学習しなおすべきである。しかし再履習で使用するBという教科書では，離合動詞や時量詞が前半，つまり前期の内容となっている。この学生が後期の再履習をしても不足箇所が補えない。足りない所を学習せず，同じ時期の授業を受ければ良いというのが今の方式である。再履習者は２年次～４年次にまたがるので，前年と同一の教科書を使用しても問題は解決しないのである。

文法を１年間の通年クラスとすれば，こういう矛盾は無くなるが，学生の履習のし易さを考えると，簡単に変更はできない。

むしろ，文法については単位の保留扱いという形での対処ができないものであろうか。これまで英語とかフランス語・ドイツ語のような文法の参考書が中国語には不足しているという状況にあったが，近年は丁寧な説明付きの文法テキストが出来てきており，それを購入させ自習させてテストのみ行うという形である。これならば，各年度の教科書に従って，試験範囲をかなり柔軟に指定することができる。この場合講義は行わず，前年の文法の単位となる。勿論履習放棄者等は受験資格を与えず通常クラスで再履習させることになる。

3.2　初級発音クラスの再履習

これは文法と異って自学だけでは難しい。ただ特に前期（Ｉｂ）は，本当の入門の発音・听写の練習で，bpmfに始まる子音，そして母音，声調の区別に時間をかける時期である。仮にＩｂで不合格となり，後期の発音（Ⅱｂ）は合格，中級の単位も取る。現行では，こういう学生にもＩｂの再履習を要求している。しかし，中級まで合格する学生に，もう一度四声練習や「あいさつ」といった学習をやらせる意味が有るであろうか。

こうした場合，Ｉｂに限っては試験のみの保留，再試，単位認定という形を認めても良いのではあるまいか。

3.3　単位認定

現在Ｚクラスも通常クラスも，単位は同じものとして認定されている。授業

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

のレベルは初級のＺクラスなら準初級程度なのにである。英語のＺクラスのように可しか与えないと定めていたところで，通常クラスの可と同一というのも少々妙なことである。

このことが，安易にＺクラスへ回ろうという学生を増やす一因ともなっていよう。

3.1，3.2で述べた単位保留で再度試験をするという方式では，試験のレベルを通常クラスと同一にすることでこの矛盾は無くなる。むろん再試験であるから評価は可のみとする。

もし現在同様，救済科目と割り切ってＺクラスを続けるなら，成績表にも，はっきりと再履習科目の単位であることを明記して，通常クラスの単位との差をつけるべきである。現に大学によっては成績証明書にこのことを明記しているのであるから。

3.4　再履習の改変の方向

再履習者の為のＺクラスは，学生の実力向上の為にはそれ程の効果が望めない。反面，英語のＺクラス，専門教育科目との時間帯の重複（これらの時間帯の分離は，過密化する時間割の中ではもはや時間外にでも設置する以外は難しい）が有って学生の履習にもかなり不便な面が有る。又，このクラスが，ただでさえ確保の難しい教官枠を食いつぶしている面もある。

したがって，前記の保留制等で，この種の負担をなるべく減ずる方向で検討したいものである。ただ従来のＺクラスには，とにかく授業に出席させ出来ても出来なくても何らかの作業をさせ，そのことで学力の不足に目をつぶって単位を与えるという機能が有ったが，その点では，学力以外に判断基準のなくなるこの保留制は，出来ない学生が未来永却単位が取れないということにもなる。しかし，その不利益は本人の不勉強から来るもので，やむをえないと見るべきであろう。

又，保留というので，試験を少し多く受ければ良いと，学生が安易に再試験に頼るのを防止する意味から受験回数を制限し，例えば２度再試験を受けても合格しない時は，今一度講義の受け直しをさせるといった制度も考えておいた方が良い。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

Zクラスを減ずれば通常クラスの教育により専任教官が当たる機会が増えるし，クラス規模の適正化の為のクラス増に対応する手段も考え易くなる。

ただ，これは中国語のみで決定できる問題ではなく，既修・初修の各外国語間で早急に案を出し合うことが必要であろう。

4. 大学教育の中での外国語教育

本稿で述べてきたことは，現在の履習法下での問題点と手近な改善点である。この履習法自体，今後変更される可能性は有るが，そうした対応は，私ども外国語教室が別途研究をしている所である。

外国語教育の必要性自体をここで改めて説くことはしないし，そのことに大学教育にたずさわる人間が疑問を持つとも思えない。しかし教育の有り方については，批判が有って当然と思う。

ただ，外国語を担当する立場からも逆に大学教育の中での外国語のあり方について不満が有る。その最大のものは，我々が苦労して教えこんだ外国語が，どうも学生が我々の手を離れた途端に，全く学生の目の前から姿を消してしまうらしいことである。少くとも，多くの論文がそれで書かれている英語だけは卒業まで学生も専門科目の中でふれざるをえない，と信じたいものだが，それすら怪しいものらしい。初修外国語となると，なお淋しい状況らしい。

中国語の学術書・論文は日本でもそれほど入手は難しくない。専門科目の演習等で，教官自身は中国語が読めない場合でも，学生に内容報告等の課題を与え，学生に外国語を使わせる工夫はできる。文献は英語のものしか読まない，というのでは，どの分野であるにせよ見方が偏ることにもなる。いわんや中国を専門とする領域，哲学・文学・歴史等ではもっと中国語の文献を利用して欲しい。これら中国関係の分野を専攻する学生も，教育学部の総合科学課程の者を除くと別段中国語を勉強しなくとも良い（勿論学習する者も多い）らしいが，漢文訓読法が利用できるとはいえ，21世紀に近い現在，専門教育のあり方，中国語を知らずともよい中国学の教育とは何か，も問われることになろう。

従来我々の認定してきた単位が，必ずしも読解力等の能力と対応していなかったことは確かで，2年勉強したといってもそういう不揃いの学生に原書を読

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ませることは，外国語の教官にとっても忍耐を強いられる仕事であるから，専門科目での初修外国語の利用が消極的である理由も分らぬではない。しかし多くの機会に使うことが重要であって，２年間の外国語科目の履習をすませても，大学での外国語教育自体は，更に専門科目の中でも続いているべきである。そうして，こうした形が，最初の学習段階での学生の学習意欲の増加にもつながるのである。

そのためにも，私たちは，もっと明確な，学力に対応した単位認定の仕方をすべきであり，関係教官と連絡して，本稿で述べてきた，カリキュラムの整理，評価内容の検討等を，早急に，できれば次年度からでも，可能な所から変更できるように進めたい。

注

1）西槇光正　「日本的漢語教学与研究」（『中国語文』'90，３期　P. 236）

2）王順洪　「日本漢語教育的歴史与現状」（『語言教学与研究』'84. 4期　P.39）

3）劉小湘　「試論対外漢語教学中的国情文化教学」（上海師大学報 '90. 1期　P.37）
又，石慧敏は，「対日漢語教学的初歩探索」（上海師大学報 '90. 1期　P.40）で，日本人留学生への教育のポイントとして，「日中の同形漢字の差の重視」等とともに，「ある基礎を有する者には文化知識の伝授を強化する」というのを挙げている。